産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年7月2日

くじら日記

太地町立博物館から

韓国・長生浦旅行記 ②

太古の「盤亀台岩刻画」

今年5月、韓国・蔚山広域市南区の祭典「2023蔚山クジラ祭り」が長生浦クジラ文化特区を舞台に開かれました。鯨類の学術研究と教育を目的に南区と協力関係を結ぶ太地町からは筆者が参加し、交流を深めました。

捕鯨で栄えた長生浦のクジラとの関わりは1890年頃からですが、クジラ捕りの起源については、さらに時をさかのぼります。1970年代に発見された1つの岩刻画（岩面彫刻、線刻画）から、その歴史がひもとかれたといいます。その遺跡「盤亀台岩刻画」がある蔚州郡へと向かいました。

長生浦から西側に進むと、起伏に富んだ農村地帯へと景色が変わりました。標高千メートル以上の山々が連なります。1時間ほどで蔚州郡の「盤亀台」に着きました。山と川が織りなす周辺の地形が、カメが伏せた姿に似ていることから、その名がついたと言います。

車を止め、遺跡までは徒歩で移動します。小川を越え、竹林を抜けます。途中、比較的原始的な形質を残すチョウセンスズガエルがいたり、恐竜の足跡が残された岩があったりと、移り行く景観とともに、時をさかのぼっていくかのような行程でした。15分ほど歩くと視界が広がり、大谷川の対岸に幅8メートル、高さ5メートルほどの岩壁が見えました。

岩壁に目をこらすと、一面に何かが描かれているのがわかりました。ガイドのキム・ギョンスクさんは「岩にはクジラを始め、海や陸、空の動物、そして狩猟の様子など約300点が描かれている」と説明してくれました。そして「この岩刻画は3500年前から7千年前である先史時代に刻まれた。切り立つ岩が屋根の役割をし、雨風から守られたことで今も残っている」と力強く言葉をつなぎました。

日は次第に傾き、西日が岩刻画を照らし始めました。すると、陰影が浮かび上がり、絵がはっきりと見えてきたのでした。クジラはコククジラなど数種類が特徴的に描かれ、また子連れで泳ぐ姿もありました。

しばらく岩刻画に見入り、先史時代のクジラ捕りの暮らしと、長い年月にわたりそれを形に残してきた岩刻画に思いをはせました。

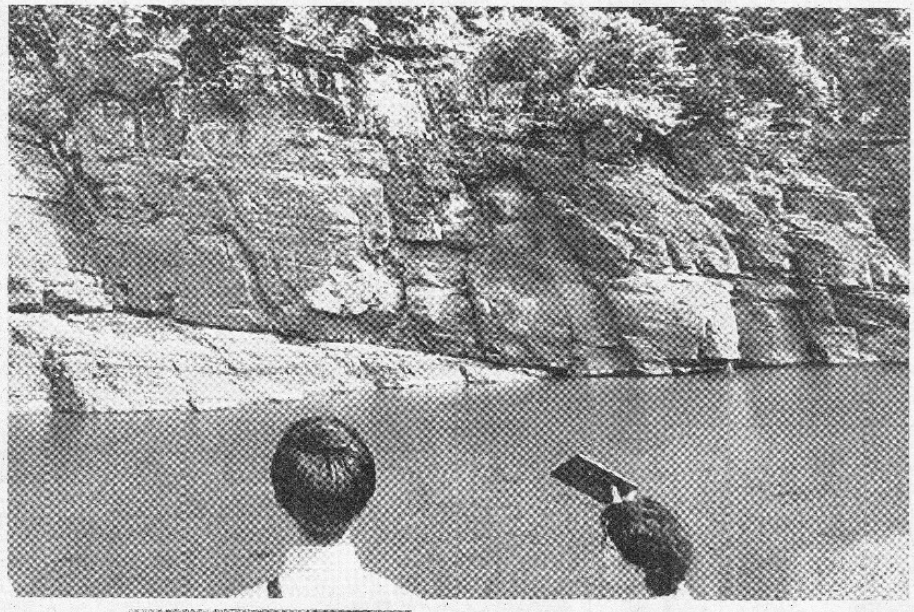
韓国の国宝にもなった盤亀台岩刻画ですが、問題も抱えています。大谷川下流の太和江は蔚山広域市の飲料水に使われており、岩刻画が発見される以前にダムが建設されたのでした。つまり、ダムの貯水によって、岩刻画は年間約40日間、水に浸っており、浸食の危機にあるようです。キム・ギョンスクさんは「先史時代から伝わる岩刻画を守りたい。しかし、太和江の水は蔚山の生命の水でもある」と苦しい胸の内を明かしました。

蔚山岩刻画博物館と長生浦鯨博物館では岩刻画の研究を進め、資料の保存と展示を通して後世に伝える役割も担っています。先史時代に刻まれた岩刻画が後世に残るかどうか、彼らは懸念しているのではないでしょうか。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則第1日曜日に掲載します。



盤亀台岩刻画を望むキム・ギョンスクさん（右）と筆者＝韓国・蔚州郡

盤亀台岩刻画に描かれた子連れで泳ぐクジラの線刻画。中央に親クジラの絵があり、その中に子クジラが描かれている（キム・ギョンスクさん提供）